

幼児による保育環境の想定外の使い方

— 日本とニュージーランドの保育者はどのように捉えるか —

松 井 愛 奈

問題と目的

幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領でもうたわれているように、環境を通して行う保育の重要性は自明であり、子どもが自ら意欲をもって環境にかかわり、様々な経験を積んでいけるよう計画的に環境を構成することが求められている。実際、環境における物の量、型、配置（Phyfe-Perkins, 1980）、人数、空間要因（Shugar&Bokus, 1986）は子どもの行動に影響を与える。建築学的な視点からは、循環のデザイン（遊環構造）や、多数の穴が開いていて様々な所から出入りできるポーラスな空間があることで子どもたちの動きが活発になり、遊びが生まれやすいこと（仙田、1992）、幼児の滞留行動が起りやすい場所には高所、別所、閉所があり、それらの種類、位置、規模によって滞留行動が異なる（仙田、1998）ことが見出されている。また、歴史的に伝承・保存された環境と、その環境を通して行われる遊びがセットになって継承されている遊誘財は、子どもの遊びを強く導く力をもっており、優れた遊誘財は遊びを誘発する（佐々木、2009）。周囲の環境が子どもの行動に影響を与え、そこで展開する遊び内容は異なることをふまえ、幼稚園における遊び場面（区画／コーナー遊び、組み立て遊び、砂遊び、躍動遊び、ルール遊び）と仲間への働きかけとの関連性を検討

し、遊び場面によって仲間への働きかけ方が異なっていることも明らかになっている（松井、2001）。

園環境のあり方として、無藤・倉持・柴坂・田代・中島・柴崎（1993）は、以下の3点を挙げている。（1）様々な形で区切られ、集中が可能でありながら、お互いの空間の交錯と交流が可能である（2）空間の中に様々な形で驚きがあり、空間要素そのものが発展し子どもの遊びを刺激する（3）様々な環境要素から子どもが選び出し、組み合わせることができることと同時に、環境要素そのものを子どもが作り出し様々な形で後に残るように子どもが作り出すことができる。各園においてこれらの概念が具体化され、子どもの発達を支えることを念頭におきながら、さまざまな子どもの遊びを想定し、意図的に保育環境の構成、再構成が行われている。そのなかで、園空間において本来の想定とは異なる使われ方が見られる（無藤ら、1993）ことや、本来通路ではない場所を子どもが繰り返し通って道になった子ども道（福田・無藤・向山、2002）など、子どもが大人にはない発想で環境を利用し、子どもが独自に環境を作り出すことが見出されている。また、子どもの遊びに多く見られる「名のない遊び」（塩川、2006）にも、大人の想定外の環境利用の例が挙げられており、子どもが既存の物の特性に縛られず、主体性や創造性を発揮していることが言及され

ている。そのような大人の意図から外れた想定外の保育環境の利用の仕方には、子どもの視点からみた環境のおもしろさ、これまで見落とされてきた保育環境のあり方が潜んでいると考えられる。しかし、実際の保育現場において、そのような想定外の使い方がどのように生じているのか、また保育者は想定外の使い方をどのように捉え、対応しているのかについて検討された研究はなく、保育環境との関連性も明らかになっていない。

そこで、本研究では「想定外の使い方」を「物に定められた標準的な用途から逸脱した非典型的・非日常的な使い方」（松井、2013）と定義し、保育において想定外の環境の使い方が生じた場合、保育者はそれをどのように捉え、対応するのかを検討する。さらに、幼保一元化が完了していること、多様な乳幼児教育サービス、保育カリキュラムのテファリキ（Te Whāriki）、ラーニングストーリーなど、近年、幼児教育・保育に関する重要な示唆を得られるとして注目を集め、さまざまな報告や研究（飯野、2014；松井・瓜生、2010；松川、2000；松川、2004；無藤ら、2014；七木田、2005；七木田・ダンカン、2015；大宮、2010）がなされているニュージーランド（以下 NZ と表記）の保育者と比較することにより、日本の保育に対する示唆を得ることを目的とする。

方法

日本および NZ において、保育者に対する「保育環境における想定外の使い方」に関する質問紙調査（無記名）を実施した。

1. 日本における調査

対象者と調査時期 2013 年 3 月～5 月、A 県私立保育所 2 園（回収数 24 および 11）、B 県

私立幼稚園 1 園（回収数 11）に配布した（全回収数 46）。

質問紙項目 ①フェイスシート：性別、年代、保育者歴、現在園の勤務歴、②子どもと保育環境とのかかわりと保育者の対応について：想定外の使い方の具体的場面を 7 つ（すべり台の逆さのぼりをする、ごっこ遊びで絵本を間仕切りとして使用する、タンバリンを靴として使用する、竹馬を杵・タイヤを臼として使用する、三輪車をひっくり返して前輪を回して砂をかけながらかき氷屋さんをする、ままごとの食材としてぬいぐるみ使用する、土などを入れて運ぶ手押し車に乗る：エデュケーラー第 49 号特集（汐見 [編]、2012）を参照の上設定）挙げ、もし保育中に子どもがそのような使い方をしていたらそれぞれについて、a) どのように対応するか：認める・許可／制止・禁止／その他（具体的に）のいずれかを選択、b) a) の対応の理由（自由記述）、③想定外の使い方について：a) 保育中に使用する物すべてについて、子どもが想定外の使い方をしていたのを見た具体例を自由記述（最大 10）、b) a) に対する対応、c) b) の対応の理由、④想定外の使い方について感じること・考えること（自由記述）、⑤保育環境について感じること・考えること（自由記述）である。

2. NZ における調査

対象者と調査時期 2014 年 8 月、NZ 南島にある保育施設 6 園に配布した。回収数は 8（3 歳未満児と 3 歳以上児の分園で、2 園同時回収となったため判別不可）、5、4、4、2（計 23）である。

質問紙項目 2013 年に国内で実施したものの英訳版であるが、以下について一部改訂した。質問紙項目②子どもと保育環境とのかかわりと保育者の対応について：想定外の使い方の具体

例については、NZ の文化に合わない 2 場面「竹馬を杵・タイヤを臼として使用する」「三輪車をひっくり返して砂をかけながらかき氷屋さんをする」を削除し、5 場面とした。また、それぞれの事例に対する保育者の対応について、日本における調査をふまえ、その他に混在していた「葛藤」を抽出するため、「迷いなく認める」「葛藤はあるが認める」「葛藤はあるが認めない」「迷いなく制止する」「その他（具体的に）」と選択肢を増やした。

3. 分析方法

本研究では、質問紙項目②④を検討する。

質問紙項目② 日本・NZ において共通に尋ねた想定外の使い方 5 場面（すべり台の逆さのぼりをする：以下「すべり台逆さのぼり」と表記、ごっこ遊びで絵本を間仕切りとして使用する：同様に「絵本間仕切り」、タンバリンを靴として使用する：同様に「タンバリン靴」、ままごとの食材としてぬいぐるみ使用する：同様に「ぬいぐるみ食材」、土などを入れて運ぶ手押し車に乗る：同様に「手押し車乗り込み」）それぞれについて、「対応」と「対応の理由」をクロス集計で分析した。「対応」については、上述したように日本と NZ で選択肢が異なっていたが、今回の分析においては、日本と NZ の比較を行う上で回答をそろえるため、「認める」「認めない」の 2 分類とした。回答の「その他（具体的に）」については、「認める」「認めない」のどちらかに分類可能であった。「対応の理由」については、表 2、表 3 に示すカテゴリーに分類した。

質問紙項目④ 自由記述をもとに、想定外の使い方全般に対する考え方を表 4 に示すカテゴリーに分類したうえで、クロス集計により分析した。

結果

1. 想定外の使い方 5 場面における日本と NZ の比較

(1) 対応の比較

想定外の使い方 5 場面（すべり台逆さのぼり、絵本間仕切り、タンバリン靴、ぬいぐるみ食材、手押し車乗り込み）における対応（認める／認めない）について、場面別に 2 対応×2 国による χ^2 検定の結果、すべり台逆さのぼり、絵本間仕切り、ぬいぐるみ食材（について生起数の偏りは有意であり（すべり台逆さのぼり： $\chi^2(1)=6.594, p<.05$ 、絵本間仕切り： $\chi^2(1)=4.143, p<.05$ 、ぬいぐるみ食材： $\chi^2(1)=28.112, p<.01$ ）、残差分析の結果、以下のことが見出された。タンバリン靴（ $\chi^2(1)=0.674, ns$ ）、手押し車乗り込み（ $\chi^2(1)=1.065, ns$ ）については有意ではなかった。日本・NZ における想定外の使い方 5 場面に対する対応の生起数と各セルの調整された残差は表 1 に示す。

「すべり台逆さのぼり」「絵本間仕切り」「ぬいぐるみ食材」について、日本と比べて NZ の方が認める割合が高かった。特に「ぬいぐるみ食材」について、NZ においては認めることが 95.6%（認めないのは 1 例のみ）とかなり高い割合となり、両国間の差が顕著であった。「タンバリン靴」「手押し車乗り込み」は差が見出されず、両国ともに「タンバリン靴」は認めないことが多く、「手押し車乗り込み」は認めることが多かった。

(2) 対応の理由の比較

日本・NZ における想定外の使い方 5 場面を「認める」場合と「認めない」場合のそれぞれの理由を検討した。

①認める理由についての比較

想定外の使い方 5 場面を「認める」理由について、「安全であれば可」「子どもの発想尊重」「本来の使い方による遊び保障」「運動発達促進」「大切に扱っていれば可」「文字とのかかわり」「文化尊重・ぬいぐるみの種類」「安全意識促進」に分類され、場面ごとにその様相が異なっていた。認める理由の分類における信頼性は、データの 10%（21）を用いて筆者と 1 名の評定者間で行ったところ完全に一致した。

日本と NZ における場面別の理由の差について、すべり台逆さのぼり以外は、期待値が 5 以下のセルが 20% 以上になるため、 χ^2 検定が不可能であった。また、すべり台逆さのぼりについて、4 理由 \times 2 国による χ^2 検定を行ったが、有意差は見出されなかった（ $\chi^2(3) = 5.464, ns$ ）。日本・NZ における想定外の使い方 5 場面を「認める」理由の生起数は表 2 に示す。以下、場面別に傾向を述べる。

表 1 日本・NZ における想定外の使い方 5 場面に対する対応の生起数と各セルの調整された残差

対応 \ 場面	すべり台逆さのぼり		絵本間仕切り		タンバリン靴		ぬいぐるみ食材		手押し車乗り込み	
	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ
認める	24 (52.2)	20 (87.0)	8 (17.4)	10 (43.5)	2 (4.3)	3 (13.0)	11 (24.4)	22 (95.6)	35 (76.1)	14 (60.9)
	-2.834*	2.834*	-2.326*	2.326*	n. s.	n. s.	-5.559**	5.559**	n. s.	n. s.
認めない	22 (47.8)	3 (13.0)	38 (82.6)	13 (56.5)	44 (95.7)	20 (87.0)	34 (75.6)	1 (4.5)	11 (23.9)	9 (39.1)
	2.834*	-2.834*	2.326*	2.326*	n. s.	n. s.	5.559**	-5.559**	n. s.	n. s.
計	46 (100.0)	23 (100.0)	46 (100.0)	23 (100.0)	46 (100.0)	23 (100.0)	45 (100.0)	23 (100.0)	46 (100.0)	23 (100.0)

注. 上段：生起数、（ ）内の数字は%。下段：残差。* $p < .05$ ** $p < .01$

表 2 日本・NZ における想定外の使い方 5 場面を「認める」理由の生起数

理由 \ 場面	すべり台逆さのぼり		絵本間仕切り		タンバリン靴		ぬいぐるみ食材		手押し車乗り込み	
	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ
安全であれば可	14	18	—	—	2	1	—	—	25	12
子どもの発想尊重	11	8	6	8	—	2	7	18	11	5
本来の使い方による遊び保障	13	6	1	—	—	—	—	—	—	—
運動発達促進	4	9	—	—	—	—	—	—	2	2
大切に扱っていれば可	—	—	2	4	—	1	1	3	—	—
文字とのかかわり	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—
文化尊重・ぬいぐるみの種類	—	—	—	—	—	—	3	6	—	—
安全意識促進	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
計	42	41	9	14	2	4	11	27	38	22

注. 各場面に対する理由は複数回答あり。—は生起なし。

a) すべり台逆さのぼり

両国共に「安全であれば可：危険がなければ認める（日本）／安全を確保するため監視（NZ）」という理由が最も多く、「子どもの発想尊重：やってみたいという気持ちを認めたい（日本）／同じこととするのでも様々な方法があることを発見する必要（NZ）」、「運動発達促進：逆さのぼりも見方を変えれば運動発達を促す遊び（日本）／運動スキルを高める（NZ）」という理由も挙げられた。

b) 絵本間仕切り

両国共に「子どもの発想尊重：同じサイズの絵本は並べるとパズルのようにも見え、遊びたくなる気持ちも理解できる（日本）／資源を使って子どもが創造性を発揮している素晴らしい事例（NZ）」という理由が最も多く、「大切に扱ってほしい：雑に扱ってはいなければ許可する（日本）／本が大切に扱われているのであれば問題ない（NZ）」という理由も挙げられた。その他、日本では「本来の使い方による遊び保障：他の子が『読みたいから貸して』と言ってきたら必ず貸してあげるという約束をしてからであればよい」、NZでは「文字とのかかわり：どのような形であっても本と関わることは、読み書き能力を発達させる初期の段階では有効」という理由も挙げられた。

c) タンバリン靴

日本においては「安全であれば可：転ばないように見守る」、NZにおいては「子どもの発想尊重：音を出すための想像力をうまく使った新しい方法」などの理由が挙げられた。

d) ぬいぐるみ食材

両国ともに「子どもの発想尊重：子どものイメージを大切にしたい（日本）／ごっこ遊びで想像力を働かせている（NZ）」という理由が最も多かった。また、「文化尊重・ぬいぐるみの種類」という理由について、日本においては「ぬ

いぐるみの種類により、魚なら見立てているのでよい」、NZにおいては、「各文化でそれぞれ違った材料・動物を料理して食べるため、各子ども・家族の文化や伝統を尊重すべきである／それぞれの子どもの文化的背景は様々であり、この事例では、料理にまつわる知識について子どもたちと話をするよい機会になる／狩猟を実際に目にする子どもはそれを再現している」という理由も挙げられた。

e) 手押し車乗り込み

両国ともに「安全であれば可：危険でなければ認める（日本）／安全に行っていれば問題ない（NZ）」という理由が最も多く、「子どもの発想尊重：乗りたい気持ちや誰かに押してほしい気持ちを受けとめたい（日本）／いつもと違った楽しい移動の方法を探求している（NZ）」という理由も挙げられた。

②認めない場合の理由

想定外の使い方5場面を認めない理由について「危険」「ルール・本来の使い方遵守」「破損」「非食材・擬人化」に分類され、場面ごとにその様相が異なっていた。認めない理由の分類における信頼性は、データの10%（22）を用いて筆者と1名の評定者間で行ったところ、完全に一致した。

日本とNZにおける理由の差を検討するため、場面別にFischerの正確確率検定を行ったところ（すべり台：2理由×2国／絵本間仕切り：2理由×2国／タンバリン靴：3理由×2国／ぬいぐるみ食材：両国で該当カテゴリーが1つのみであったため検定除外／手押し車乗り込み：3理由×2国）、「絵本間仕切り」「タンバリン靴」について生起数の偏りが有意であり（絵本間仕切り： $p=0.002$ 、両側検定／タンバリン靴： $p=0.030$ 、両側検定）、「すべり台逆さのぼり」「手押し車乗り込み」については有意差が見出され

なかった（すべり台逆さのぼり： $p=.525$ 、両側検定／手押し車乗り込み： $p=.541$ 、両側検定）。日本・NZにおける想定外の使い方5場面を「認めない」理由の生起数は表3に示す。以下、場面別に傾向を述べる。

a) すべり台逆さのぼり

認めない理由に差は見出されなかった。両国ともに「危険：すべて来る子どもとぶつかって危ない（日本）／他の子どもがすべて来るとけがをする（NZ）」が最も多く挙げられ、日本では「ルール・本来の使い方遵守：下からのぼらないという約束・ルール（日本）」という理由が続いた。

b) 絵本間仕切り

日本では「ルール・本来の使い方遵守：絵本は読んだり見たりするもの／絵本は遊びに使うものではない／絵本の本来の使い方を伝えるべきである」という理由が圧倒的に多く、「破損：絵本が破れる」という理由が少なかった。一方、NZでも「ルール・本来の使い方遵守：本は読むためのものである」という理由の方が、「破損：本が破れてしまう」という理由より多いが、日本のような大差はなかった。

c) タンバリン靴

日本では「ルール・本来の使い方遵守：タンバリンは音を鳴らす楽器であって玩具ではない／楽器なので正しい使い方を知らせる」という理由が多く、「破損：タンバリンが壊れてしまう」

「危険：すべてケガをする危険がある」がそれに続いた。一方、NZでは「破損：タンバリンを足で使うと壊れる／タンバリンの柔らかい素材の部分が傷んでしまう」が多く、「ルール・本来の使い方遵守：タンバリンは楽器として使用するべきである」「危険：転んでケガをする」がそれに続いた。

d) むいぐるみ食材

両国ともに「非食材・擬人化」という理由に該当した。日本において「むいぐるみには人（家族、友だち）と同じように接してもらいたい」「むいぐるみを擬人化し、人もしくは友だちのように扱っている」「むいぐるみは食材ではない」、NZにおいても「動物の使用法として正しくない」という理由が挙げられた。

e) 手押し車乗り込み

両国ともに「危険：倒れると危険（日本）／落ちてけがをする可能性がある（NZ）」という理由が最も多く、次に「ルール・本来の使い方遵守：乗るものではなくてもものを運ぶもの（日本）／用具の正しい使い方ではない（NZ）」という理由も挙げられた。

2. 想定外の使い方全般に対する考え方

想定外の使い方全般に対する考え方について、肯定的な意見として「発想の豊かさ」「学びの機会」「リスクや困難の必要性」「危険がなければ容認」、否定的な意見として「安全管理」

表3 日本・NZにおける想定外の使い方5場面を「認めない」理由の生起数

理由	場面		すべり台逆さのぼり		絵本間仕切り		タンバリン靴		むいぐるみ食材		手押し車乗り込み	
	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ	日本	NZ
危険	12 (60.0)	3 (100.0)	—	—	9 (17.6)	3 (11.5)	—	—	9 (75.0)	8 (53.3)	—	—
ルール・本来の使い方遵守	8 (40.0)	—	32 (94.1)	11 (57.9)	30 (58.9)	9 (34.6)	—	—	3 (25.0)	6 (40.0)	—	—
破損	—	—	2 (5.9)	8 (42.1)	12 (23.5)	14 (53.9)	—	—	—	1 (6.7)	—	—
非食材・擬人化	—	—	—	—	—	—	34 (100.0)	1 (100.0)	—	—	—	—
計	20 (100.0)	3 (100.0)	34 (100.0)	19 (100.0)	51 (100.0)	26 (100.0)	34 (100.0)	1 (100.0)	12 (100.0)	15 (100.0)	—	—

注：（ ）内の数字は%、—は生起なし。

「集団生活のルール」「正しい／大切な扱い」、判断に関する意見として「可否判断の迷いや難しさ」「判断基準統一の必要性」という9カテゴリーに分類された。意見の分類における信頼性は、データの10% (14) を用いて筆者と1名の評定者間で行い、一致率は $\kappa = .92$ で、不一致部分は協議の上で調整をした。日本・NZにおける想定外の使い方に関する意見の分類と例は表4に示す。

想定外の使い方全般に対する考え方について、表4の分類をもとに日本とNZの比較を行った。2国×9意見では、期待値が5以下のセルが20%以上となり χ^2 検定が不可能であったため、2国×3意見（肯定的・否定的・判断）による χ^2 検定の結果、生起数の偏りは有意であり ($\chi^2(9) = 16.229, p < .01$)、残差分析の結果、以下のことが見出された。日本・NZにおける想定外の使い方に関する意見の生起数と調整された残差は表5に示す。

日本と比べてNZの方が肯定的な意見が多く見られた。そのうち「学びの機会」について最も回答数が多く、「リスクや困難の必要性」はNZのみに見られ、日本では言及されなかった。NZと比べて日本に多かったのは、否定的な意見と判断に関する意見であった。そのうち、「安全管理」についてNZより多い傾向があり、「可否判断の迷いや難しさ」および「判断基準の統一の必要性」は日本にのみ見られ、NZでは言及されなかった。

考察

1. 想定外の使い方5場面に対する対応と対応の理由

想定外の使い方である5場面について、「すべり台逆さのぼり」「絵本間仕切り」「ぬいぐるみ食材」の3場面は日本と比べてNZの方が認

める割合が高く、「タンバリン靴」は両国ともに認めない割合が高く、「手押し車乗り込み」は両国ともに認める割合が高かった。全体的に日本と比べてNZの方が認める割合が高く、想定外の使い方に対して寛容な傾向があると言える。以下、場面ごとにまとめる。

(1) すべり台逆さのぼり

日本と比べてNZの方が認める割合が高かった。認める理由および認めない理由に差はなく、両国ともに安全であるかどうか判断の基準となり、安全であれば認め、危険であれば認めないという理由が最も多かった。

(2) 絵本間仕切り

日本と比べてNZの方が認める割合が高かった。認める理由に差は見出されず、両国ともに子どもの発想を尊重することが挙げられた。認めない場合、日本では破損するという理由は非常に少なく、絵本は読むものとして、本来の使い方を守るべきであるという認識が強かった。NZではその逆の結果、つまり、本来の使い方を守るべきというよりも破損するという理由の方が多く見られた。

(3) タンバリン靴

両国共に認めないことが多かった。認めない理由について、絵本同様、日本では破損するというよりも、タンバリンは楽器として本来の使い方を守るべきであるという認識が強かった。NZではその逆の結果、つまり、本来の使い方を守るべきというよりも破損するという理由が多く見られた。

(4) ぬいぐるみ食材

最も大きな差が見出された場面である。NZでは、その子どもがもつ文化的背景を考慮し、95.6%が認めるのに対して、日本では26.7%にとどまった。NZの保育は、テファリキ (Te Whāriki: 織物を意味するマオリ語) にも見られるように、マオリ文化が深くかかわっており、

表4 日本・NZにおける想定外の使い方に関する意見の分類と例

意見の分類		国	例
肯定的	発想の豊かさ	日本	・身の回りにあるものをいろいろなものに見立てる子どもの発想は素晴らしく、無駄にしたいくない ・子どもの想定外の使い方を見るにつれ、大人が発想もしないようなイメージ力、やわらかい考え方に驚かされる
		NZ	・子どもたちは想像的で、遊具などを使うおもしろい方法を思いつく ・「想定外の相互作用」は毎日見られるし、私たちはそれに価値を置いて、大切にしている
	学びの機会	日本	・子どもたちが何を楽しみ、学んでいるのかを見て、何が必要でどのようなかわりが大事なのかを考えることが子どもたちの健やかな成長につながる ・できないにとらわれず、チャレンジしながら失敗をくりかえしたり、工夫したり、新しいものを生み出そうとしている。
		NZ	・想定外の相互作用は、子どもたちが自身の学びを自分で進めていることを示すものであり、子どもたちは新しい、ワクワクするような方法を試している ・プログラムに柔軟性をもたせ、子どものアイディアや考えを尊重し、遊びにかかわり、想定外の相互作用を奨励して学びを深めていくことが重要である
	リスクや困難の必要性	日本	なし
否定的		NZ	・困難なことに取り組んだり、リスクを経験したりすることも子どもの発達には必要である ・子どもにはリスクを経験すること、目標を設定することを奨励すべきである
	危険がなければ容認	日本	・危険がなければ制止せず、認めて見守る ・危険をとまなわない範囲で認めていくべきだと思う
		NZ	・介入をする場合は、「安全性」の問題がある場合のみである ・健康／安全が損なわれないものである限りは、環境や教材などを想像的に、創造的に、表現豊かに、どんな形で使用しても良いと思う
	安全管理	日本	・大人数の安全管理を求められる場での許容は難しい ・危険やケガにつながることは、その都度対応、予測して対処することが大事である
		NZ	・遊びを安全に行うために、代替の方法を示すべきである ・「想定外の相互作用」は園のルールや安全性の問題に抵触することが多い
判断	集団生活のルール	日本	・遊具や道具には一つひとつ約束を決めて保育をしている ・園には多くの子どもがいるため遊び方のルールは大切であり、家では許されることも、園では禁止になることが多い
		NZ	・想定外の相互作用は、園のルールや安全性の問題に抵触することが多い ・チームや園内のルールを考えて制止する
	正しい・大切な扱い	日本	・危険な使い方やものを大事にしない間違った使い方はよくないので、他に使えるようなものを探してみるよう提案する ・その子の気持ちや遊びを認めた上で、本来使ってほしい遊び方に促していきたい
		NZ	・子どもたちが創造的に材料／教材を使用する際、それらを大切に扱う方法を理解できるようにかわる必要がある ・教材・おもちゃ・遊具を大事にしているかを考えて制止する
	可否判断の迷いや難しさ	日本	・子どもの想像（創造）力をのばすためには、どこまでを認めてよいか難しく悩む ・子どもの力や楽しみたいという思いは受けとめたいが、危険につながることもあるので境が難しい
		NZ	なし
	判断基準統一の必要性	日本	・同じ状況を見て人もそれぞれ感じ方が異なるが、同じ園・クラスの担任であれば少しでも同じ（近い）気持ちをもって保育がしたい ・他の保育者との認識の違いが子どもを混乱させないか心配である
		NZ	なし

表5 日本・ニュージーランドにおける想定外の使い方に関する意見の生起数と調整された残差

国	肯定的					否定的				判断			計
意見の分類	発想の豊かさ	学びの機会	リスクや困難の必要性	危険がなければ容認	計	安全管理	集団生活のルール	正しい・大切な扱い	計	可否判断の迷いや難しさ	判断基準統一の必要性	計	
日本	25 (29.1)	9 (15.2)	0 (0.0)	5 (5.8)	43 -3.772**	20 (23.3)	5 (5.8)	6 (7.0)	31 2.290**	7 (8.1)	5 (5.8)	12 2.793**	86 (100.0)
NZ	13 (25.5)	19 (37.2)	4 (7.8)	6 (11.8)	42 3.772**	4 (7.8)	2 (3.9)	3 (5.9)	9 -2.290**	0 (0.0)	0 (0.0)	0 -2.793**	51 (100.0)

注：上段：生起数、() 内の数字は％。下段：残差。** $p<.01$

異文化を尊重することが根付いているのではないだろうか。日本では、ぬいぐるみを擬人化して捉え、食材としての抵抗感が強く、認められないことが多かった。一方で、日本においても「ぬいぐるみの種類により、魚なら認める」という回答もあり、食文化の違いによる影響も考えられる。

(5) 手押し車乗り込み

両国共に、認める割合が高く、認める理由および認めない理由で差は見出されなかった。すべり台逆さのぼりと同様、安全であるかどうか判断基準となり、安全であれば認め、危険であれば認めないという理由が最も多かった。

2. 想定外の使い方全般に対する考え方

NZでは、「想定外のことは毎日起こり、価値をおいて大切にしている」「自由に解釈して創造的に使える教材を意図的に用意している」「介入をするのは安全性の問題がある場合のみ」「健康／安全が損なわれなければ、想像的、創造的、表現豊かにどんな形で使用してもよい」「挑戦やリスクも重要」「学びが生じている」など、安全性の確保がなされていれば、想定外の使い方を肯定的に捉える意見が大半であった。全般的に日本と比べてNZの方が、想定外の使い方に対して寛容であることが示唆される。

日本においては、NZと同様、子どもの発想のおもしろさや、想定外の使い方から遊びを広げていける可能性など肯定的に捉える一方で、NZでは言及されなかった、どこまで想定外の使い方を認めてよいのか判断に迷ってしまうことや、保育者間で想定外の使い方を認める／認めない判断基準の統一の必要性が述べられていることが特徴的である。また、安全管理のために、集団生活を送るうえで想定外の使い方を認めるににくいことについての言及も多かった。実際、想定外の使い方は、子どもにとって目新しくお

もしろさもあり（松井、2011）、そこから新たな遊びが展開されることもある一方で、安全面への配慮が欠かせない。例えば、「すべり台逆さのぼり」や「手押し車乗り込み」にも見られたように、両国ともに、安全であれば認める、逆に危険であれば認めないという理由が最も多く挙げられ、安全管理を前提として考えていると言える。

一方で、NZでは「リスクを経験」することの重要性についても述べられており、日本には見られない記述であった。NZの保育者は、「リスクを経験すること、そこから自ら考える」ことも重視し、「他者を傷つけたり、悪影響を及ぼしたりする場合には、子どもたちは自分の行為がもたらす結果について知る必要があるが、保育者が見守っている場合は、楽しむことができ、それを許容することが子どもにとって最もよい」「保育者の役割は、子どもたちのそばにいて、子どもたちを導き、学びを広げ、共に学び、子どもたちが常に安全であることを確保することである」など、保育者がある場で見守ることができて安全管理ができるのであれば、日本と比べて想定外の使い方を容認する傾向が高いことが読み取れる。

ここで、子どもの遊びを見守ることに関して、保育者の配置基準等、安全確保につながる最低基準を考える必要がある。例えば保育所における保育者1人あたりの子どもの人数は、日本では0歳児3人、1・2歳児6人、3歳児20人、4歳児以上30人であるのに対して、NZにおいては、2歳未満児5人、2歳以上児10人である¹⁾。0歳児については日本の方が手厚いが、歩行を始め動きが活発になっていく1歳児以上については、保育者1人あたりの子どもの数はNZの方が少なく目が行き届く。日本の保育者はNZに比べて3歳児では2倍、4歳児以上では3倍もの子どもを1人で見なければならない。日本

の保育環境に関する最低基準の劣悪さはかねてより問題視されている（全国社会福祉協議会、2008）。日本においては、保育者 1 人が受け持つ子どもの数が多すぎるため安全管理が十分にできず、子どもの発想の豊かさを認め、想定外の使い方を許容したくてもできない状況が生まれている可能性があるのではないだろうか。

実際の保育においては、本研究で検討した 5 場面に限らず、多種多様な想定外の使い方が生じている（松井、2014）。安全管理は必須であり、物の大切な扱い方はていねいに伝えていく必要がある。一方で、子どもの発達に必要なリスクの経験の考慮もなく、想定外の使い方は一律に排除する、あるいは、園のルールとして排除せざるを得ないというのでは、子どもの豊かな発想をつぶしてしまいかねない。頻繁に生じる想定外の使い方を生かし、子どもの遊びを育み、子どもの発達を支える環境構成のあり方を模索していく必要がある。

今後の課題

本研究は、想定外の使い方の 5 場面に対する保育者の考えを尋ねたが、実際の保育において生じるさまざまな想定外の使い方を含めて検討する必要がある。また、園の保育方針、保育内容、保育環境によって結果が異なる可能性がある。質問紙を精緻化し、より多様な園において幅広く調査を拡大していくことも今後の課題として残される。さらに、実際の保育場面において子どもたちはどのような想定外の使い方をしながら遊びを展開し、保育者はどのような対応をしているのか、両国においてそれらの姿を詳細に捉え、今回の結果と合わせて検討する余地があるだろう。

注

- 1) The number of qualified teachers your ECE service needs | Education in New Zealand
<http://www.education.govt.nz/early-childhood/running-an-ece-service/employing-ece-staff/the-number-of-qualified-teachers-your-ece-service-needs/>

引用文献

- 福田秀子・無藤隆・向山陽子 2002 園舎・園庭の改善を通しての保育実践の変容 (III): 研究者と保育者によるアクションリサーチの試み. 日本保育学会大会研究論文集 (55). 786-787.
- 飯野 祐樹 2014 ニュージーランド就学前統一カリキュラム Te Whariki (テ・ファークィ) の作成過程に関する研究: 関係者へのインタビュー調査を通して. 保育学研究, 第 52 巻, 第 1 号, 90-104.
- 松井愛奈 2001 幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連. 教育心理学研究, 第 49 巻, 第 3 号, 285-294.
- 松井愛奈 2011 子どもが見出す・つくり出す保育環境—「想定外」の使い方—. 日本保育学会第 64 回大会論文集.
- 松井愛奈 2013 保育環境における想定外の使い方—保育者の対応とその理由—. 日本乳幼児教育学会第 23 回大会論文集.
- 松井愛奈 2014 子どもが見出す・つくり出す保育環境—「想定外」の使い方 (2) —. 日本保育学会第 67 回大会論文集.
- 松井由佳・瓜生淑子 2010 ニュージーランドにおける乳幼児保育制度—幼保一元化のもとでの現状とそこからの示唆—. 奈良教育大学紀要, 第 59 巻, 第 1 号, 55-70.
- 松川由紀子 2000 ニュージーランドの保育と子育ての支え合い. 溪水社.
- 松川由紀子 2004 ニュージーランドの子育てに学ぶ—親に優しいスロー保育の伝統と現状. 小学館.
- 無藤隆・飯野裕樹・松川由紀子・浜口 順子・内藤知美 2014 ニュージーランドにおける現在の保育のあり方について (第 14 回国際交流委員会企画シンポ

- ジウム報告). 保育学研究, 第 52 巻, 第 3 号, 404-414.
- 無藤隆・倉持清美・柴坂寿子・田代和美・中島寿子・柴崎正行 1993 園環境は子どもにとってどのような意味を持つか. 保育学研究, 第 31 巻, 113-122.
- 七木田敦 2005 ニュージーランドにおける就学前教育改革について: 幼保の一元化からカリキュラム策定まで. 保育学研究, 第 43 巻, 第 2 号, 214-222.
- 七木田敦・ジュディス・ダンカン 2015 「子育て先進国」ニュージーランドの保育—歴史と文化が紡ぐ家庭支援と幼児教育. 福村出版.
- 大宮勇雄 2010 学びの物語の保育実践. ひとなる書房.
- Phyfe-Perkins, E 1980 Children's behavior in preschool settings—A review of research concerning the influence of the physical environment. In L.G. Katz (Ed.), Current topics in early childhood education Vol.3. Norwood, NJ: Ablex. Pp.91-125.
- 佐々木宏子 2009 保育者のための遊誘財データベースづくりから見えてきたこと—保育の質を語るための新しい保育専門用語の開発—. 保育の質的充実を目指して—遊誘財データベースの構築にむけて—. 鳴門教育大学附属幼稚園研究紀要, 第 43 集, 巻頭言.
- 仙田満 1992 子どもとあそび. 岩波新書.
- 仙田満 1998 環境デザインの方法. 彰国社.
- Shugar, G.W., & Bokus, B. 1986 Children's discourse and children's activity in the peer situation. In E.C. Mueller & C.R. Cooper (Eds.), Process and outcome in peer relations. London: Academic Press. Pp.189-228.
- 塩川寿平 2006 名のない遊び. フレーベル館.
- 塩川寿平 2007 大地保育環境論. フレーベル館.
- 汐見稔幸(編) 2012 遊具類の目的外使用、どこまで許す?. エデュカール第 49 号. 臨床育児・保育研究会.
- 全国社会福祉協議会 2008 機能面に着目した保育所の環境・空間に係る研究事業総合報告書.

上げます。また、本論文の執筆にあたりご助言をいただきました奈良教育大学横山真貴子教授、国立教育政策研究所掘越紀香総括研究官、京都教育大学古賀松香准教授、甲南女子大学上田淑子准教授、現地調査協力者の松井由佳さんに感謝申し上げます。本研究は JSPS 科研費 25750379 の助成を受けたものです。

謝辞

本研究にご協力くださいました日本およびニュージーランドの園の先生方に厚く御礼申し

Abstract

How Teachers Respond When Children Engage in Unexpected Interactions with Physical Environment in Early Childhood Settings — A Comparison between Japan and New Zealand —

Mana MATSUI

This study employed a questionnaire survey to find out how and on what grounds teachers in Japan and New Zealand respond to five specific children's unexpected interactions with physical environment in early childhood settings (climbing up the slide from the bottom / using books as a wall of the room for their pretend play / wearing tambourines on their feet in place of shoes / using stuffed animals as ingredients in the pretend cooking / riding on a wheelbarrow for moving sand). Overall, teachers in New Zealand were more likely to approve the children's unexpected interactions than teachers in Japan. The most prominent difference was observed for the response to the children "using stuffed animals as ingredients in the pretend cooking." Japanese teachers tended to disapprove the act, as they personalized the stuffed animals and felt a strong hesitation to regard them as food materials. On the other hand, all the New Zealand teachers but one approved the act, as they placed more importance on respecting the child's cultural background such as hunting animals for food.

Teachers both in Japan and New Zealand generally revealed positive attitudes toward unexpected interactions, finding the child's ideas interesting and appreciating their potential to extend the play, and were willing to approve them unless there are safety issues. However, only Japanese teachers described the difficulty in deciding to what extent the unexpected interactions should be allowed, or the fact that the group settings prevent them from approving such interactions. In addition, the importance of risk-taking experience was pointed out only by New Zealand teachers, and they were more likely than Japanese teachers to permit unexpected interactions. These results may reflect the differences in the minimum standards to secure the safety of children at early childhood centers between the two countries, including the child-teacher ratio. The results suggested that the number of children that each teacher is responsible for in Japan is too large for the teachers to provide sufficient safety control, and they have little choice but disapprove unexpected interactions, despite their wish to respect children's creative ideas.

Key word: physical environment in early childhood settings, unexpected interactions, New Zealand